日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察：教育の特徴および効果、課題に着目して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-06-28 キーワード (Ja): キーワード (En): Simulated patient, Standardized patient, Educational method, Educational effect, Basic nursing education 作成者: 本田, 多美枝, 上村, 朋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/00000259

著作権は本学に帰属する。

資料

看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察
－教育の特徴および効果、課題に着目して－

本田多美枝[1)]　　上村朋子[1)]

本研究の目的は、日本の看護基礎教育における模擬患者(Simulated Patient, 以下 SP とする)活用の実態について、方法論としての特徴および教育効果、課題を文献から明らかにすることである。29 文献を分析した結果、SP の活用は演習および看護技術試験の 2 つに大別され、基礎看護学実習開始前の 1-2 年次に集中していることが明らかとなった。SP の活用により、学生は看護のリアリティを擬似体験し、感情を揺さぶられ、学習姿勢が変化するという教育効果が報告された。また、SP からのフィードバックが、患者側にたって考えることを促すという点で最も重要だとされている。一方、SP を活用した教育方法の課題として、訓練を受けた SP の活用は費用負担が大きいこと、事前の準備、訓練には時間がかかること、SP や教員の質の確保が難しいことなどが挙げられている。さらに、技術試験に活用する場合には、SP の標準化とその養成、客観的評価の確立も課題である。SP を活用して教育効果を得るには、目標に応じたシナリオ作成、SP－教員間の打合せ、SP のトレーニングなどの事前準備が重要であることが示唆された。

キーワード：模擬患者、標準模擬患者、教育方法、教育効果、看護基礎教育

Ⅰ　はじめに

「模擬患者」(Simulated Patient, 以下 SP とする）参加型の教育方法は、1975 年に日本に紹介され、医学や薬学、理学療法などの教育現場においてすでに導入されている[1) 2) 3)]。模擬患者とは、「患者のもつあらゆる特徴、即ち単に病歴や身体所見にとどまらず、病人特有の態度や心理的、感情的側面に至るまでを物理的に可能な限りを尽くして、完全に模倣するように訓練を受けた健康人」[4)] とされ、SP 研究会での養成と教育機関への派遣が行われている。

看護界においては、商業誌に特集が組まれたこともあり、2000 年ごろより、その導入を試みた実践報告が散見されるようになった。SP の導入は、再現可能かつリアリティに近い学習状況を創り出すため、患者に関わる以前の、段階的かつ実践的学習を促進する教育方法としても期待されている。その一方で、現段階の報告は個々の実践報告にとどまっており、教育方法としての特徴や活用可能性を示すエビデンスの集積およびその提示が課題となっている。

近い将来、本学独自の模擬患者の養成および模擬患者参加型の授業導入を視野に入れ、まずはその第一段階として、既存の研究成果を分析し、模擬患者参加型の教育方法について考察することが不可欠であると考えた。

1）日本赤十字九州国際看護大学

Ⅱ　研究の目的と意義

1．研究目的

日本の看護基礎教育における模擬患者参加型の教育方法について、文献から、その特徴と教育効果および課題を明らかにする。

2．意義

既存の文献をレビューすることで､SP 参加型教育方法の活用可能性を示すエビデンスの蓄積に貢献できると考える。また、その成果を基礎資料として活用することにより、本学において SP 養成および SP 参加型の教育方法を効果的に導入する上での指針が得られるものと考える。

Ⅲ　研究方法

文献研究とした。

1．研究方法および対象

1）データ収集方法

（1）医学中央雑誌 Web　Ver.4（1985～2007 年）を用い、キーワードを「模擬患者」「標準模擬患者」として検索した。分類は「看護」、文献の種類は「原著論文」とした。

（２）該当文献 245 件には、「模擬体験」「擬似体験」「体験学習」「ロールプレイ」「シミュレーション」などの文献も含まれており、それらを除外すると 177 件となった。うち、タイトルおよび Abstract から、看護基礎教育における SP 参加型の教育方法を主題としている研究論文 29 件を選定し、本研究の分析対象とした。なお、SP は前述の通り、「訓練を受けた健康人」と定義されているが、日本の看護界においては、SP 参加型教育そのものが模索の段階にあり、必ずしも訓練を受けた一般市民が SP を担っている状況にはない。むしろ、そのような実態を浮き彫りにすることが重要であると考えたため、本研究では、訓練の有無、SP の背景にかかわらず、SP 活用の教育方法を主題にしている文献すべてを分析対象にした。

（３）SP 導入の背景や方法論的検討の示唆を得るために、関連書籍、看護系雑誌での特集、医学や薬学などの研究論文も参考にした。

２）分析方法

（１）個々の文献を、作成したフォーマットに基づき整理した。

（２）次いで、以下の視点で文献を分析した。

①現状における SP 参加型教育の特徴

②教育効果

③課題

２．倫理的配慮

著作権を侵害しないよう、文献の出典を明確にした。

Ⅳ　結果

１．研究論文の年次推移

日本の看護基礎教育において、SP 参加型の教育を試みた研究論文（原著）の年次推移については、図 1 に示した。研究論文としての発表は、1998 年以前には検索されず、1999 年より散見されるようになっている。1999 年から 2006 年までの 8 年間に 29 件が報告されている。

２．SP 参加型教育の特徴

現状における SP 参加型教育の特徴として、教育の実施時期、教育内容および展開方法、SP の背景と要件から整理した。

１）SP 参加型教育の実施時期

SP 参加型教育の実施時期については、1 年次の実施が 16 件（47.1%）、2 年次 14 件（41.2%）、3 年次 2 件（5.9%）、4 年次 1 件（3.0%）、不明 1 件であった（複数学年での実施を含む）。傾向として、３年課程、４年課程の別にかかわりなく、基礎看護学実習前の 1、2 年次に集中して SP 参加型教育を実施していることが明らかとなった。

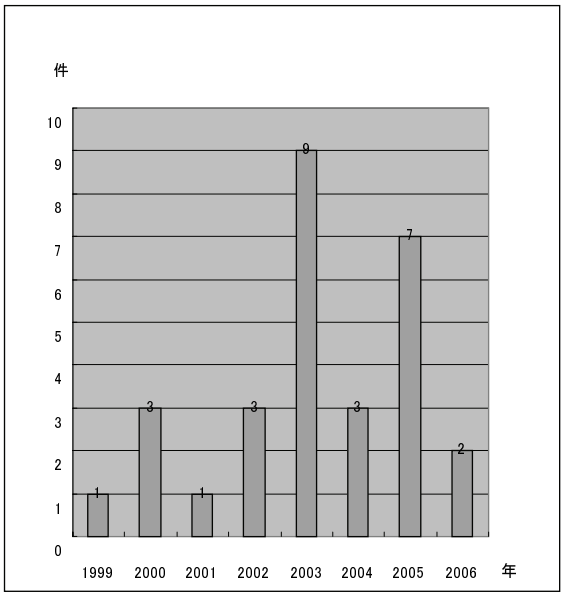

図 1.　文献の年次推移

２）SP 参加型教育の内容分類

SP 参加型教育の内容については、表 1 に示す通り、３つに大別できた。最も多かったものは、＜演習への SP 活用＞（19 件、65.5%）であった。次いで、＜看護技術試験への活用＞（8 件、27.5%）、＜調査への活用＞（2 件、6.9%）であった。

（１）演習への SP の活用

演習への SP 活用（19 件）については、さらに 7 つに分類された（表 1）。最も報告が多かったものは、コミュニケーション技術演習（8 件）[5)6)7)8)9)10)11)12)]であった。次いで、看護基本技術（5 件）[13)14)15)16)17)]、看護過程の展開（3 件）[18)19)20)]であった。その他、フィジカルアセスメント（1 件）[21)]、模擬患者体験（1 件）[22)]、患者

教育（1 件）[23] であった。

表 1　SP 参加型教育の内容分類

分類		件数（%）	
演習	コミュニケーション技術	8（27.6）	19(65.5)
	看護基本技術	5（17.2）	
	看護過程の展開	3（10.3）	
	フィジカルアセスメント	1（ 3.5）	
	模擬患者体験	1（ 3.5）	
	患者教育	1（ 3.5）	
試験	客観的臨床能力試験	5（17.2）	8(27.5)
	実技試験	3（10.3）	
調査	終末期患者への対応	2（ 6.9）	2(6.9)
合計			29 (100)

コミュニケーション技術では、8 件中 7 件は、看護過程を展開する基礎看護学実習前の 1、2 年次に実施されていた。設定された患者の疾患はさまざまであったが、40-60 歳代の言語的コミュニケーション可能な患者が設定されており、入院時の面接や特定場面での関わり、あるいはケアをしながらコミュニケーションを深める場面が設定されていた。コミュニケーション技術演習に SP を活用する理由としては、看護を展開していく上でコミュニケーション技術の重要性が増す一方で、学生のコミュニケーション技術は未熟であること、また、患者や看護師役のイメージ作りが困難な中での学生同士によるロールプレイでは、学習効果としての限界があげられた。このような学生の傾向を受けて、コミュニケーション技術演習に SP を活用することによる教育効果や、演習企画・事例設定の妥当性を検討する報告が大半を占めていた。

看護基本技術については、5 件とも 2 年次に実施されており、うち 1 件は 1 -2 年次の継続実施であった。患者設定については、20-80 歳代と年齢にばらつきがあり、疾患や症状などを具体的に提示しているものもあれば、臥床患者というような簡単な設定のみのものもあった。SP に実施する援助内容としては、血圧測定、臥床患者の足浴、術後患者の車椅子移動・洗髪、複数模擬患者のいる模擬病室での観察など多様であった。看護基本技術の演習に SP を活用する理由としては、患者への直接的経験なしには看護実践能力の育成は困難であるが、その力が未熟な段階にある学生が、他者と直接関わる中で看護技術を現実的に学ぶ方法としての有用性が述べられており [17]、実習前に、個別性に配慮した応用力を学習させたいという意図からであった [14]。

看護過程の展開については、情報収集や計画に基づくケアの実施場面に限定して SP を活用していた。実施時期は、1、2 年次であった。

（2）看護技術試験への SP の活用

看護技術試験に SP を活用した報告は、2002 年以降散見されるようになっており、8 件中 5 件が客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：以下、OSCE とする）に SP を活用していた [24] [25] [26] [27] [28]。

OSCE は、臨床能力を客観的に評価する方法であり、1975 年、医学教育界の Harden により提案されたものである [28]。記述や口述試験では測定困難な学生の実践能力を評価する方法としての有効性が指摘されており、看護教育においても、近年、導入が試みられるようになっている [24]。また、試験に客観性を持たせるためには、患者の症状や心情をシミュレーションするにとどまらず、一定レベルで標準化された反応を示す「標準模擬患者（standardized patient）」を活用する場合が多い。今回の結果では、OSCE を実施した 8 件中、「標準模擬患者」を活用している報告は 2 件 [26] [27] であった。

その他、OSCE との記載はないが、吸引や寝衣・シーツ交換、足浴などの実技試験に SP を活用している報告が 3 件あった [29] [30] [31]。

看護技術試験への SP の活用は、1 年次 5 件、2 年次 2 件、1-2 年次の継続実施は 1 件であった。

（3）調査への SP 活用

終末期患者に対する学生の対応技術を調査する目的で、SP を活用した報告が 2 件あった [32] [33]。これら 2 件は、正規の授業外で行った一連の調査報告であった。

3）展開方法

SP 参加型教育の展開方法は、演習、看護技術試験いずれにおいても、①事前の準備、②実施、③フィードバックから構成されていた。

①事前の準備には、演習・試験の全体企画に加え、目的に基づくシナリオの設定、SP への依頼と打ち合わせが含まれていた。また、②実施の際には、学生数や SP 数、演習・試験内容、時間などに応じて、複数のステーションが設定され、必要に応じて学生が移動するという形式が多くとられていた。さらに、実施内容に基づいて③フィードバックの場が設けられていたが、中でも SP からのフィードバックは、「患者側にたったまなざしへの転換」を図る上で重要視されていた。

他方、演習と看護技術試験においては、方法論的な違いも見られた。演習で SP を活用する場合には、多くが設定した患者像や状況・場面などを事前に提示し、学生に事前学習を促していた。また、SP への実施場面では、実際に看護者役となる学生が限られてくるために、どのようにして学びの均一化を図るか、それぞれで工夫がなされていた。

看護技術試験については、試験課題の事前提示は行われていたが、試験という性格上、患者像や状況設定などは試験開始時に学生に提示されていた。また、技術試験の場合には、学生全員が看護者役を実施し、評価を受けることになるが、その評価が客観的に行われるよう、「標準模擬患者」を活用したり、学生による自己評価、SP による評価、教員による評価といった多角的評価を行うなどの工夫がなされていた。

4）SP の背景と要件

（1）SP の背景

誰が SP となっているのかについては、表 2 に示した。最も多かったのは、看護教員（7 件、24.1%）であった。次いで、専門機関で一定の訓練を受けた一般市民（4 件、13.8%）、看護師（4 件、13.8%）であった。大学独自で訓練した SP の活用報告も 3 件（10.3%）あった。

SP を誰が担うかによって、得られる成果が異なることも報告されている。大学ら[24]は、OSCE に一般市民ボランティア、臨床看護師、看護教員を SP として活用し、評価の傾向を明らかにしている。その結果、一般市民ボランティアが SP の場合、学生はリアリティを体験するのに対し、看護師が SP の場合は、臨床の実情にあった技術に対する評価を受けることを可能にする。その一方で、看護教員が SP の場合には、学生はレディネスに応じた教育的フィードバックを受けることが可能になると報告している。これらのことから SP を活用する際には、演習や技術試験の目標をどこに置くかによって、誰を SP とするのが効果的かを検討する必要性について指摘している。

表 2　SP の背景

SP の背景	件数（%）
看護教員	7（24.1）
専門機関で訓練を受けた一般市民	4（13.8）
看護師	4（13.8）
大学で訓練した SP 研究会メンバー	3（10.3）
その他（職員、卒業生など）	5（17.2）
不明（記載なし）	6（20.7）
合計	29（100）

（2）SP に求められる要件

SP に求められる要件については、以下の 4 つに分類できた。

①シナリオを理解する力
②臨場感をもって演じる力
③患者として体験したことを言語化してフィードバックする力
④一般市民の感覚

①シナリオを理解する力に関しては、対象となった 29 文献中 28 件（97%）にシナリオの設定があり（1 件は不明）、教育の目的・目標に応じて患者設定や状況設定がなされていた。それ故に、演じる SP にはシナリオの理解が欠かせない。同時に、性別や年齢層はシナリオと一致しているほうが、学生のイメージ化にもつながりやすいといえる。また、SP には、②臨場感をもって演じる力に加え、③患者として体験したことを言語化して、学生にフィードバックする力が求められることが示された。その際には、④一般市民の感覚が必要であり、患者の目線、視点から感じたことや思っ

たことを学生にフィードバックすることが学生の気づきを高めることにつながる。

こうした要件を満たすためには、事前の打ち合わせはもちろんのこと、一定の訓練が必要になると考えられる。今回、NGO などの専門機関で、一定の訓練を受けた SP を活用している報告は 4 件、大学独自に訓練を行い、SP として活用している報告は 3 件あり、全体の 24.1%が「訓練を受けた健康人」を SP として活用していることが明らかとなった。看護教員や看護師、その他の者が SP を担う場合、シナリオの理解やイメージトレーニングを各自で行ったなどの報告は一部に見られたが、一定の訓練を行ったとの報告は見られなかった。

他方、OSCE に「標準模擬患者」を活用する場合には、上記の要件に加え、次のことが付与されることが示された。すなわち、比較的自由度の高い SP とは異なり、「標準模擬患者」では、学生のケア場面を想定した反応までをも基準化し、役作りを行うことが求められる [25]。

３．SP 活用による教育効果

では、SP を活用することによる教育効果としてはどのようなことがあげられているだろうか。SP の背景や教育の方法論的特徴は異なっていたが、報告されている教育効果の内容には類似性が見られ、以下の 3 つに大別できた。

①SP が創り出す「リアリティ」によって生じる効果

②「日常とは異なる」学習環境によって生じる効果

③「模擬」という状況によって生じる効果

①SP が創り出す「リアリティ」によって生じる効果については、ほとんどの文献で言及されていた。学生は、臨場感あふれる SP の演技によって、学生同士では得られない「リアリティ」のある体験をすることができる。SP の創り出す現実に学生は否応なく巻き込まれ、感情を揺さぶられることとなり [17]、また SP からフィードバックされた言葉の重みが学生の気づきを高める [9]。SP とのかかわりは、印象深く学生にインパクトを与える [6] [25] ばかりではなく、患者の気持ちや視点を知る [11] [18]、患者を包括的に理解する重要性に気づく機会となり [8]、患者の反応を受け止めながら援助を実施するという基本に立ち戻る機会になることが報告されている [14]。

②「日常とは異なる」学習環境によって生じる効果については、日常とは異なるリアリティを体験するが故に、学生の学習姿勢には変化がもたらされる。SP の参加により、学生は適度な緊張感をもって演習に臨むことができ [27]、主体的な学習姿勢を引き出すことができる [8]。また、看護はやり直しのきかない 1 回性の営みであるという現実を実感することで、学習を継続させる動機になること [22]、さらには学生同士で普段行っている演習に対して、真剣にやっていなかった、甘かったなどと反省し、自身の学習姿勢を問い直す機会にもなっている [28]。

三つ目の、③「模擬」という状況によって生じる効果については、現実の患者ではない健康人に関わるからこそ生じる効果である。すなわち、SP を活用した模擬状況は、安全性、再現性、反復性を有する学習環境を意図的に作ることが可能であり、実習前の段階的、実践的学習を強化することが期待できる。同時に、その成果が実習につながるとすれば、結果として、患者の人権を守ることにもなる。

４．SP 参加型教育方法の課題

次いで、前述した教育効果をあげるための課題について分析した。SP 参加型教育の全般にかかわる課題と、看護技術試験の場合に付加される課題とが見出された。

１）SP を活用した教育方法全般の課題

SP を活用した教育方法全般の課題は、次の 5 つに分類できた。

①費用と教育効果のバランスを考える必要がある

②事前の綿密な準備が必要となる

③学びの質が SP の質に左右される

④学びの質が看護者役体験の有無に左右される

⑤学びの質がチューターの力量に左右される

もっとも切実な課題は、①費用と教育効果のバ

ランスである。前述の通り、教育効果の観点からSP参加型教育を導入する動きがある一方で、費用負担が大きいのも事実である。専門機関に一人のSPを依頼するには、1時間当たり1万円程度の費用がかかる[9]。近年では、大学独自にSPを養成する動きもあるが、ボランティアとして依頼するにしても、その訓練には時間と労力がかかる。そのため、費用対効果を十分に吟味して活用することが課題である。

二つ目は、SP参加型教育の効果をあげるためには、②事前の綿密な準備が必要となる。これには、患者や状況設定など、教育目的に応じたシナリオ作成などの準備が含まれる。また、SPおよびチューター（教員）との事前打ち合わせをしっかりと行っておくことが教育効果を左右する。

三つ目としては、SPの質に学生の学びが左右されることから、その養成が課題となっている。

四つ目は、学生の学びの質が、看護者体験の有無により左右されることがあげられる。費用や時間、学生数の問題などから、演習形態の多くは、グループの代表学生1名が看護者役を実施し、他の学生は観察者役となって見学する場合が多い。学生の気づきには個人差はあるだろうが、実体験からの学びの有用性が指摘されていることを考えると、実際に看護者役となった学生と、観察者役となった学生とでは、学びの質や量に差が生じてしまうことは避けられない。これに対して、看護者役を当日発表することで、全員が事前学習をして臨むように促す、観察する学生が当事者として参加できるように、観察者の立場から気づいた点を述べる場を設ける、かかわりの場面をビデオ撮影した教材をもとに、SPを含めた全体で討議して学びの共有化を図る、などの工夫がなされていた。看護者体験の有無による学びの差を埋める工夫は大きな課題であるといえる。

五つ目は、チューター（教員）の力量に学生の学びの質が左右されることがあげられる。進行役となるチューターは、マンパワーの問題から複数グループを担当することが多く、細かな点の確認や評価ができにくい状況にある。そのため、必要なときに必要なかかわりを行っていくには、チューターの力量によるところが大きい。質・量の両面から課題を有しているといえる。

2）看護技術試験にSPを活用する場合の課題

看護技術試験にSPを活用する場合には、さらに以下のことが課題として分類できた。

①試験内容の質的均一性を保つ必要がある
②SPの標準化を図る必要がある
③評価の客観性を保つ必要がある

一つ目の課題は、シナリオを複数設定する場合、①試験内容の質的均一性を保つことが必要となる。二つ目は、②SPの標準化を図ることである。SPの反応の仕方が、実技試験時の学生の行動に影響するため、SPの条件を詳細に設定しておくと共に、標準模擬患者を活用できるよう、その養成が課題となる。三つ目の課題は、③評価の客観性を保つことである。試験である以上、客観的な評価は欠くことができないが、そのためには、評価項目や評価基準を明確に設定し、点数化を行うこと、また、学生による自己評価、SPによる評価、看護教員による評価が、適正・公平に行えるようにすることが課題である。

V　考察

日本の看護基礎教育におけるSP参加型教育は、2000年ごろより報告が散見されるようになったが、その数は決して多くはない。SPを活用することの教育効果は多くの文献で示されているが、SPを活用する上でクリアすべき課題は多々あり、容易には導入できない状況があると考えられる。そこで、以下には、SP参加型教育の活用可能性と課題について考察する。

1．SP参加型教育の活用可能性

SPは、主に1-2年次の＜演習＞や＜看護技術試験＞に活用されていることが明らかとなった。SP参加型教育の実施時期は、3年課程、4年課程の別にかかわらず、初めて一人の患者を受け持ち、看護過程を展開する基礎看護学実習前に設定される傾向にあり、実習前の段階的・実践的教育を促進する意図があった。

教育効果としてあげられていた内容は、①SPが創り出す「リアリティ」によって生じる効果、

②「日常とは異なる」学習環境によって生じる効果、③「模擬」という状況によって生じる効果、に大別された。SP の活用によって、学生は看護のリアリティを疑似体験し、SP の創り出す現実に否応なく巻き込まれ、感情を揺さぶられる体験をする。それと同時に、SP からのフィードバックは、学生にとって患者の気持ちや視点を知る貴重な機会となり、「患者側にたったまなざしへの転換」をもたらしていた。さらに、日常とは異なるリアリティを体験するが故に、学生は適度な緊張感をもって主体的に学習に取り組むなど、学習姿勢に変化が見られた。

学生の看護実践能力を涵養するには、患者への直接的経験が重要であるが、患者の権利意識の高揚に伴い、資格のない学生が臨床の場で患者への直接的ケアを実施することは難しくなっている。まして、現代の学生は、少子化、核家族化などで、年代の異なる他者と接する機会が少なく、学生同士の演習では患者の状況をイメージすることは困難である。このような状況下にある学生にとって、SP 参加型教育は、患者に関わる以前の、段階的・実践的学習を促進する上で貴重な機会になるものと考える。また、SP 参加型教育は、体系的な知識を与えるような教育にはむかないが、認知（知識や理解力）、情意（態度やコミュニケーション能力）、精神運動領域（技能）の統合を可能にする方法論としては有用であり [1]、教育の目的を明確にした上での SP の活用により、前述の教育効果を生むことが期待できるものと考える。

さらに、大滝 [34]は、SP の活用により医療者養成に患者や一般市民の参加が可能になることの効果を指摘している。すなわち、現在の医療現場における「医療者－患者関係」は、1)能動－受動関係、2)指導－協力関係をこえて、3)協同作業関係が多く求められていると述べた上で、SP 参加型教育は、医療者が対応した内容を患者がどのように感じ、理解したかを重視するため、協同作業型の関係作りをトレーニングする機会となる。同時に、模擬患者という立場で、医療関係者以外の人が医療者の教育に関与すれば、非医療者の医療に対する理解が深まるばかりか、医療という特殊な世界に、一般社会の常識的な判断や感性がもたらされることも期待できると指摘している。しかしながら、本研究の結果から、一定の訓練を受けた一般市民を SP として活用している報告は 7 件（24.1%）にとどまっており、一般市民の参加による教育効果という点からは課題を残している現状が浮き彫りになった。加えて、SP を誰が担うかによって得られる成果は異なることが指摘されており [24]、先の大滝の指摘も含めて、SP を活用する上での検討事項であると言えよう。

２．SP 参加型教育の課題

SP の活用には多くの課題があることも明らかになった。訓練を受けた SP の活用は費用負担が大きいこと、また十分な教育効果を得るには目標に応じたシナリオ作成、SP－教員間の綿密な打合せ、SP のトレーニングなどの事前準備が重要な鍵となる。事前準備に多大な時間・労力・費用がかかることを考えると、教育効果が高いとは言っても、現状においてはそう頻繁に活用できる方法論とは言い難い。また、安全性、再現性に優れているとはいえ、看護者役を体験できる学生の数は限られる。したがって、SP 参加型教育を用いる前に、基本的な知識と技術の学習が十分であること、それを統合して用いるときに起こる困難を教員が予測して演習や技術試験に組み込むことが重要であり、教育方法の工夫をどのように行うかを含めた教員の企画力、準備力が問われるところでもある。

また、SP 養成のための訓練については、NGO などの専門機関に加え、大学独自に訓練を行う例も報告されている。しかしながら、現状では、訓練を受けた SP の活用は、全報告の 24.1%にとどまり、また訓練の内容については詳述されていなかった。本来の定義では、「SP は患者のもつあらゆる特徴、即ち単に病歴や身体所見にとどまらず、病人特有の態度や心理的、感情的側面に至るまでを物理的に可能な限りを尽くして、完全に模倣するように訓練を受けた健康人」[4] とされており、一定の訓練を受けた者を SP として活用することが教育効果を高める上で重要になると考える。それ故、今後、訓練を受けた SP を養成していくためにも、訓練内容について基準を明確にしていくことが、SP を看護基礎教育に効果的・効率的に導

入していく上での課題になると考える。

３．本研究の限界と今後の課題

本研究では、日本の看護基礎教育における SP 参加型教育の実態について、方法論としての特徴、教育効果、課題を文献から明らかにした。本来、SP は「訓練を受けた健康人」と定義されているが、日本の看護界においては、SP 参加型教育そのものが模索の段階にあり、必ずしも訓練を受けた一般市民が SP を担っている状況にはない。実際、検索された 29 文献中、訓練を受けた SP の活用は７件のみであった。それ故、本研究では、むしろ、そのような実態を浮き彫りにすることが重要であると考え、訓練の有無、SP の背景にかかわらず、SP 活用を主題にしている文献すべてを分析対象にした。これにより、日本の看護基礎教育における SP 参加型教育の実態について、全体的な特徴を明らかにすることはできたものと考える。しかしながら、本来の定義である「訓練をうけた健康人」を SP として活用した教育方法に焦点を絞って、結果を分析することはできていない。それ故、今後は、訓練の有無を含め SP の背景別に丁寧な分析を進めていくことが課題である。

また、本研究により、SP 活用による教育効果は高く、看護基礎教育への活用可能性は高いことが示されたが、その一方で、多くの課題を残していることも明らかとなった。今後は、これら課題のひとつひとつについて検討を加え、本学において SP 養成および SP 参加型教育を効果的に導入していく上での指針を明確化していくことが課題である。

Ⅵ　結論

本研究では、日本の看護基礎教育における SP の活用について、方法論としての特徴、教育効果、課題を文献から明らかにした。29 文献の分析結果から、以下のことが明らかとなった。

１）SP の活用は演習および看護技術試験の 2 つに大別され、基礎看護学実習開始前の 1、2 年次に集中していることが明らかとなった。

２）SP の活用により、学生は看護のリアリティを疑似体験し、感情を揺さぶられ、学習姿勢が変化するという教育効果がある。また、SP からのフィードバックが、患者側にたって考えることを促すという点で最も重要である。

３）SP を活用した教育方法の課題として、訓練を受けた SP の活用は費用負担が大きいこと、事前の準備、訓練には時間がかかること、SP や教員の質の確保が難しいことなどが挙げられている。

４）看護技術試験に SP を活用する場合には、SP の標準化とその養成、客観的評価の確立が課題である。

５）SP を活用して教育効果を得るには、目標に応じたシナリオ作成、SP－教員間の打ち合わせ、SP に対する一定の訓練などの綿密な事前準備が重要である。

本研究は、平成 19 年度日本赤十字九州国際看護大学奨励研究として実施したものである。

受付　2009. 7. 14
採用　2009. 9. 17

文献

1) 藤崎和彦：アメリカの医学教育における模擬患者の導入の現状とその理論. 看護展望、18 (8)：44-48、1993.
2) 松田裕子、八木敬子、平井みどり：神戸薬科大学における模擬患者の養成と実習への導入. 医療薬学、31 (2)：125-135、2005.
3) 沖田一彦、宮本省三、板場英行、阿部敏彦：理学療法教育へのシュミュレーションの導入－模擬患者を用いたインテーク面接の実習について. 理学療法学、19 (1)：18-24、1992.
4) 植村研一：Simulated Patient. 医学教育、19：218－221、1998.
5) 清水裕子、野尻雅美：模擬患者を活用した学生用老年者コミュニケーション教育プログラムの特性. ヒューマン・ケア研究、6:45-54、2005.
6) 肥後すみ子、奥山真由美、太湯好子：SP 導入によるコミュニケーション演習に基づく学習効果と教育技法の評価. 岡山県立大学保健福祉学部紀要、12 (1)：33-43、2006.
7) 堀美紀子、松村千鶴、淘江七海子：模擬患者を

活用した教育方法の検討－学生の評価能力の育成に向けて．香川県立保健医療大学紀要、１：89-96、2005.
8）堀美紀子、松村千鶴、淘江七海子：模擬患者を導入したコミュニケーションスキルトレーニングの学習効果．香川県立医療短期大学紀要、5：105-114、2004.
9）鈴木玲子、高橋博美、常盤文枝、藤田智恵子、山田晧子：コミュニケーション学習にSP(Simulated Patient)を取り入れた教育技法の開発．埼玉県立大学紀要、4：19-26、2003.
10）石山いずみ、梅野貴恵、佐々木容子、本松美和子、内田弘子、山崎和代：看護学生のインタビュー演習におけるコミュニケーション技術の様相－乳癌模擬患者の入院時心理把握場面に焦点を当てて．九州国立看護教育紀要、6（1）：31-34、2003.
11）鈴木玲子、高橋博美、藤田智恵子、常盤文枝、山田晧子：成人看護学における対象理解を深める教育方法の検討－SP を取り入れたコミュニケーション授業の導入と展開．看護展望、28（3）：46-52、2003.
12）池田明美、富田幸江、佐川みゆき、関根由紀子、福田泰子：コミュニケーションの理解を深めるための基礎看護学実習前演習の試み－学生以外の模擬患者を導入して．看護教育の研究、17：118-121、2000.
13）城戸滋里、猪又克子、本戸史子、岡崎寿美子：看護基礎技術演習への模擬患者（SP）導入に関する学生の評価．北里看護学誌、8（1）：38-47、2006.
14）嶋根久美子、纐纈美保子、榎本康世、瀧　泉、牧田まり子、渡辺暢子：看護基礎教育における学内技術演習の検討－模擬患者への基礎看護技術演習の効果．日本看護学会論文集　看護教育、36：12-14、2005.
15）仁平雅子、登喜和江、山下裕紀、柴田しおり、川西千恵美：複数の模擬患者を活用した「観察」に関する教育方法．神戸市看護大学紀要、6：19-27、2002.
16）森崎由佳：模擬患者を用いたシミュレーション学習の教育効果－看護技術の統合にむけての演習．日本看護学会論文集　看護教育、35：187-189、2004.
17）和住淑子、山本利江、青木好美、河部房子、高橋幸子：模擬患者への看護体験による看護学生の認識の発展．千葉大学看護学部紀要、26：63-67、2003.
18）加悦美恵、飯野矢住代、河合千恵子：基礎看護学における SP 参加型の授業と臨地実習の連繋－学生の臨地実習の体験のふりかえりから．日本看護科学会誌、26（2）：67-75、2006.
19）田中初江、佐藤和子、村田日出子、福石牧子、杉山恵子：模擬患者参加型の看護過程教育の実際－より実践に即したイメージしやすい教育効果を目指して．神奈川県立よこはま看護専門学校紀要、2：1-11、2005.
20）内田弘子、佐々木容子、本松美和子、梅野貴恵、石山いずみ、山崎和代：看護学生による乳癌模擬患者の入院時インタビュー場面における全体像の把握．九州国立看護教育紀要、6（1）：3-6、2003.
21）矢野理香：フィジカルアセスメントの模擬患者演習における学生の学び．天使大学紀要、3：1-11、2003.
22）和住淑子、山本利江、斉藤しのぶ：模擬患者への看護を初めて体験した初年次看護学生の体験内容と認識の特徴．千葉看護学会会誌、5（2）：49-54、1999.
23）大池美也子、山本千恵子、長家智子、本田里香、北原悦子：看護学基礎教育における教育技術習得への取り組み－模擬患者を用いた糖尿病患者教育の演習から．九州大学医学部保健学科紀要、4：37-45、2004.
24）大学和子、西久保秀子、土蔵愛子：基礎看護学における客観的臨床能力試験（OSCE）の実践－ボランティアによる模擬患者と現任看護師による標準模擬患者との評価から．聖母大学紀要、2：27-34、2006.
25）土蔵愛子、大学和子、西久保秀子：模擬患者による看護技術実技試験における評価に関する検討．聖母女子短期大学紀要、16：65-73、2003.
26）若尾ふさ、野中　靜：看護学の客観的臨床能

力試験における看護ケアステーションの標準模擬患者標準化へのプロセス. 医学教育、34：44、2003.
27）大久保祐子、里光やよい、豊田省子、菅野こずえ、亀田真美、野中　靜、田口ヨウ子：標準模擬患者を用いた基礎看護学における客観的臨床能力試験の試み. 日本看護学教育学会誌、13：235、2003.
28）清水裕子、大学和子、野中　靜：基礎看護技術実技試験におけるSPを導入したOSCEの試み. 聖母女子短期大学紀要、15：53-63、2002.
29）森田敏子、南家貴美代、有松　操、木子莉瑛、早野恵子、岩本テルヨ、松永保子：達成動機を刺激する模擬患者を用いた看護技術教育方法の開発に関する研究－模擬患者を導入した吸引の看護技術試験；模擬患者の認識から. 日本看護学会論文集　看護教育、36:311-313、2005.
30）南家貴美代、森田敏子、有松　操、木子莉瑛、早野恵子、岩本テルヨ、松永保子：達成動機を刺激する模擬患者を用いた看護技術教育方法の開発に関する研究－模擬患者を導入した吸引の看護技術試験に対する自由記載から. 日本看護学会論文集　看護教育、36:308-310、2005.
31）梶野恵美子、久徳美鈴、岩切ひとみ、大久まり子、松元八重子、冨安恵子、中薗博子：教員が模擬患者となる看護技術教育法の効果. 日本看護学会論文集　看護教育、32:131-133、2002.
32）關戸啓子、石川奈津子、片桐由美子、白水典子、別府由香里：終末期患者に対する看護学生の対応技術に関する研究(1)－模擬患者とのコミュニケーションを分析して. ホスピスケアと在宅ケア、8（1）：38-43、2000.
33）關戸啓子、石川奈津子、片桐由美子、白水典子別府由香里：終末期患者に対する看護学生の対応技術に関する研究(2)－模擬患者とのコミュニケーションを分析して. ホスピスケアと在宅ケア、8（1）：44-48、2000.
34）大滝純次：日本の看護教育への模擬患者導入の意義. 看護展望、18（8）：49-51、1993.

Literature Review on application of simulated patients in basic nursing education -Focused on its characteristic, effects and challenges-

Tamie HONDA, R.N., Ph.D[1)]., Tomoko UEMURA, R.N., M.B.A[1)]

The objective of this paper is to look into literature that discuss application of simulated patient (SP, hereafter) for basic nursing education in order to know its characteristics, effects and problems. The analysis of 29 articles revealed that an SP is used for 1) skills training and 2) skills assessment most frequently in the context of in-school practice for 1st year and 2nd year students who have little or no on-the-job training. The major effect reported is that simulation using an SP can stimulate the students' feelings greatly and change their attitude of learning. The quality of the feedback from the SP is considered to be most important because that is the key to cultivating the attitude in the students to put oneself in the patient's shoes. The problems include a high cost for hiring a trained SP, much time needed for preparation and difficulty in securing a high-quality SP and good instructors. In addition, the standardization of an SP and the establishment of criteria are necessary for doing assessment. Thus, it is suggested that a careful planning of a scenario, close communication between the SP and the instructors, and the training of SP are essential to effective application of an SP.

Key words: simulated patient, standardized patient, educational method, educational effect, basic nursing education

1) The Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing